

落花
情談

春風日記

松村春輔著

五篇

下



A 517
10

落花 春風日記 第五編下
清潭

東京 松村櫻雨著

第拾九章

狸中さん 大さう 違ひぢやア 春のうら 花招き
 ぶぎの 先生ヨ 私小 新作い ずーこの 燈花さんと
 種々 お被り 一番 仕構を 備けさう 入る 暮の 急
 げ 手速く おとや やう なら ぢやア あら 春の かな
 今 小橋へ 歩の つま 燈花さんと 一処 下流 舟へ 往

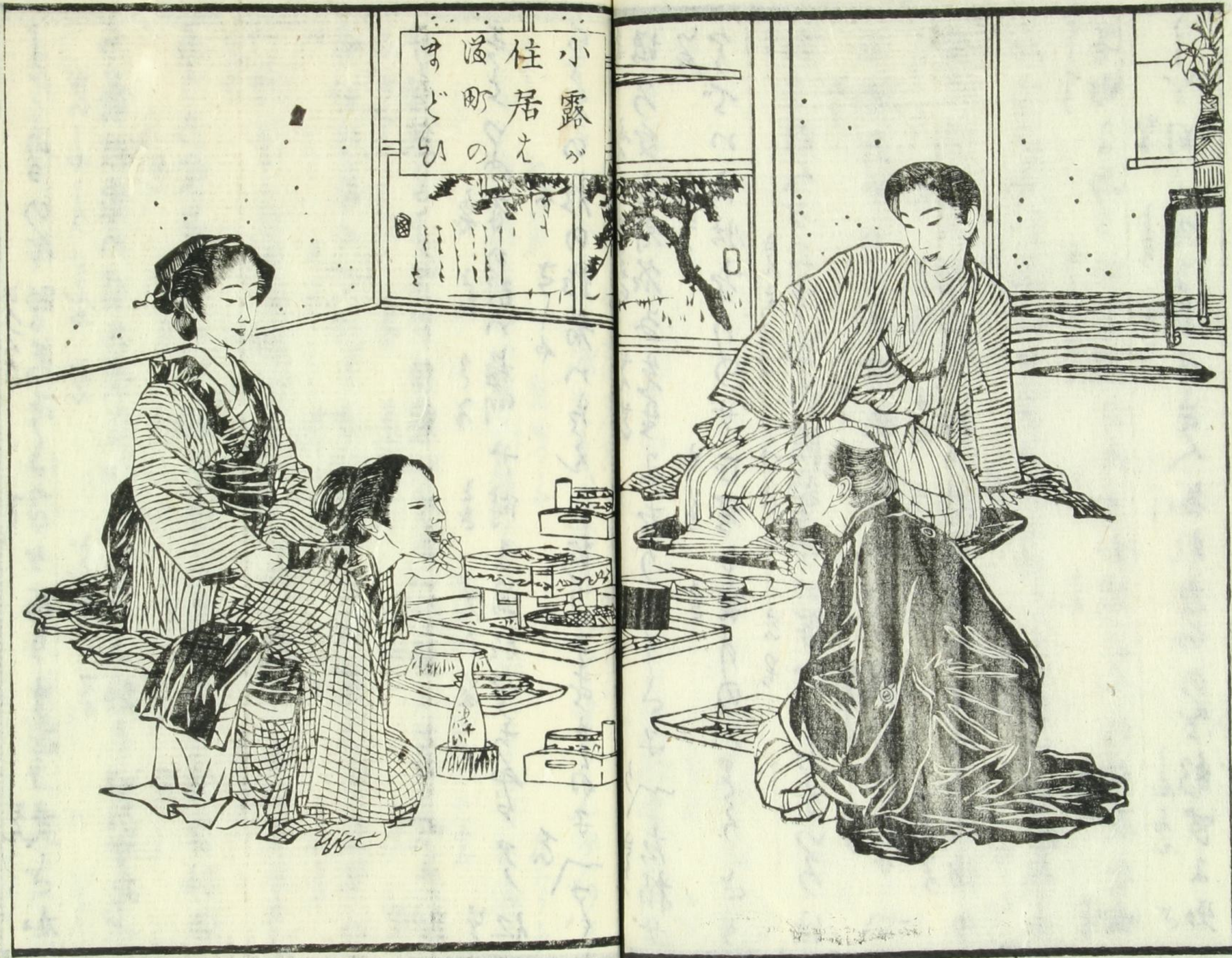
う待て居ぬ人遅くも十一時頃よの出向くと
作つたのどおろ毛ウをぬ入りませぬやう
己強の具形もぬぬ入のどまらぬ人
ヨ今日の由一の都合よよると今度のおお人
よもつ骨おつ賞の寄のぢやアおらぬへ
大役どがまさへうまう中付るとおめく由お母
話よなのと後勢もたち己等も居己居さんへ
して寸志もつら張どおら
ませんが松松大役と申すが私よ出来ませぬ
若由甘く往ないと大愛な志やうぬへ
おむづおーいるぢやアぬへおめくの胸を何松
ともなるあととサマア何松あととらお所せなき
いなねへ十二松松を込み入とむづうーいりぢやア
ありませんマア具形おのゆさんよぬーを
おきいすー左松サ寄中ぬーを志望も
お處違ひの松サおめく由知てる通りか雪さんが

う待て居ぬ人遅くも十一時頃よの出向くと
作つたのどおろ毛ウをぬ入りませぬやう
己強の具形もぬぬ入のどまらぬ人
ヨ今日の由一の都合よよると今度のおお人
よもつ骨おつ賞の寄のぢやアおらぬへ
大役どがまさへうまう中付るとおめく由お母
話よなのと後勢もたち己等も居己居さんへ
して寸志もつら張どおら
ませんが松松大役と申すが私よ出来ませぬ
若由甘く往ないと大愛な志やうぬへ
おむづおーいるぢやアぬへおめくの胸を何松
ともなるあととサマア何松あととらお所せなき
いなねへ十二松松を込み入とむづうーいりぢやア
ありませんマア具形おのゆさんよぬーを
おきいすー左松サ寄中ぬーを志望も
お處違ひの松サおめく由知てる通りか雪さんが

あきりいのおぶなく死んであひの知ごつごが時頃
ちやマア訪いの能ひとつみゆんごま延で居己
屋さんぐ初り弱さんご弱知しそお雪さんと能
ひ中ふまうやア痛ひの金快し一ツの一塊断うよ
なつて縁徳も再びまじとする中うよなるといひ工
風サむも弱さん弱知し七甘くワレお雪さん
との中と能ひ中うよおるふのおめくでなうの
ちやア出来ぬ人程言サそ後者よまる核りて楽な
解よあひあうのござう一生無念で其くあひぢや
アなうあいのござうあまの能くお散ましうと出
来まきうも知れまきんが弱さんよ延ひまきのが
核りが悪ひお人へ十二弱さんごうそおま人の客ま
うあんどぞあひこのなう核りが悪ひがあうの
死人をうあんとお人死ごそれともよし町で怪
しいあうでもあうこのうへんなうのあうま

てそつうして漬物の能ひのがあるつや甘しくい
ありおせんが糸葉の能くつろつろが取りまきヨ
一ヨシまぢやきんどん程むヨヘイト云ひワ下婢の
おきんハ花屋敷へ出てゆく程をく者も来
り盃のとりやりたどありとつんども趣向よ異
なる穿ちも何ぢおバ器しく是よ記さど着发よ
ろしく穿ちたる中人程中のあよ何り新
字を子よありハアハハは新字の且取穿ち假名
垣り文も有なる先生よありまゝと子ハ左指サ
今でハ大姑おりのサ正室を書りのわとらとら
知ずおんが云々此の滑稽づい芽つづらうのりは
も猫志やらハ不審樹とのよかゝ感心な候サ
穿ちる文ハ猫連の畑の好不穿ちまきヨ探訪の
届くさけの忍れまき子ハホハ左指でまねおも
苦味よおる時お奴さんやお彼さんの情交を
一と目ト知る居るさ人知れたのを新字よ知

小 住 小
露 居 露
が ち が
ま だ の
ど ひ



しつあるのを聴く天までもるるにガあり申すヨ文どか
ら藝妓衆の皆乃文さんや何極ふ想くつひおまふ
らう乃文さんガ口を掛くはよ来たるとは往來の
つ度やうもかめとあまののとは陰で思はわう
いひ申すはハア一変はとうとも然る文文公ハ
平氣然としくはの思いておひや根こそぎ竹き節
まよつふ等の口ハ格別ナ時よ且ね今ち中アア仁
らうおの程の作者ハおんとあり申すお子ア

さうサ繪入の深澤先生と團扇の金賀さんがあつたヨ
ハ一深澤さんの印刷者としてあり申すお孫
と探れ申すお子さうともア深澤のお孫お水の子
代目で先代も孫して代をよすお孫らおの上おサ
ハ一親割亭主人お永ハ深澤さんの子で申すお
ア一モ二モおの作者の親玉お金賀さんハ如何ぞ
お申す金賀さんお故人よなつと松亭金水の言
弟ぶか甘のヨワレお書お申へが傍で居る春雨

さんとおる個ひとりで首くびが泳なぐなりすし〜ア〜ア〜アお、
身み般ぱんさぬ能よく身みおのす〜アノ先さ刺さく〜どんなりよ
かみ〜りぐお福まめ福まであざい〜ま〜〜らう〜今いま由
程ほど中ちゆうさんぐお向むひよあぐ〜知しぞあざい〜ま〜こま
〜ア〜とうう〜くお中ちゆう〜と〜〜知し〜慶けい勝しょう様さま〜ま〜んが
押おうけ〜ひりや〜と。け内うちおつぬの茶ちややのわん
居い色しき居いのま〜よおき〜サアお茶ちやがま〜のりま〜と
アノお慶けいさん〜ぬ何なにぞあざい〜ま〜ま〜〜お冥めい〜と
〜ぎい〜ま〜あ〜〜おゆきさんの心こころ流ながるや其その後のちの心こころ
尋たずぬうし〜せん〜海うみをせん〜日ひは場ば所しよ全ぜん快かいの方かた
〜所ところ居いの中ちゆう〜せう〜〜海うみはありお〜〜モウ〜おき
〜と能よく〜お皆みな喜よろこ悦び不ふ存ぞんを〜せれよ〜時ときるゆ〜
おのぬぐ見み舞まいて舞ま〜〜輝きら〜形かたち娘むすめの急いそぎの引ひき〜り
〜う〜面白おもしろい〜吐は〜やあ〜〜りおん〜りあ〜このが太おほ
壯さう葉は刺さよな〜り〜ら〜ゆ〜と〜マ〜あ〜ま〜ぢ〜ア〜ま〜と海
か〜つ〜お〜吐は〜と〜吐は〜〜ま〜せ〜ら〜お〜〜ま〜が〜能よひ〜ヨ女むすめ

後縛徒の群に入り四圍踏まをも編歴せしかの
後うらの天の將りの計程の存る事と存する程
丁と張る時中と出る雲の目より由人の目と悲び
るやせし罪惡よ身とかく土泥もあふざれば又
みや浪迷や跡よしく東海へと望り来る傳の次
は解き多べし

第二拾章

人多ければ天は絶天定中の人よ孫と聖徳の

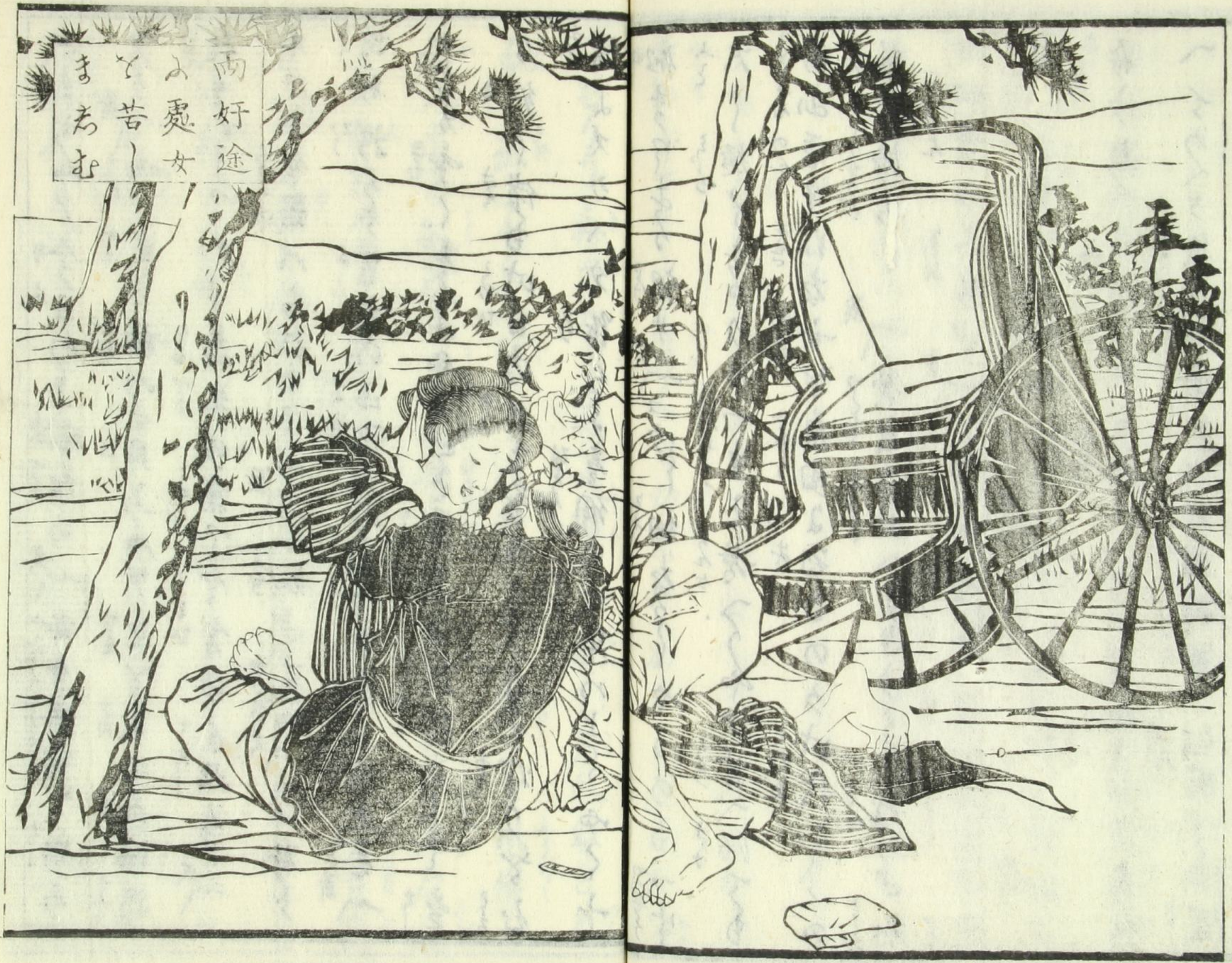
實の實なる裁裁は幾つう丈馬馬の罪惡自然よ
かやせめり今の大坂西系よ由任孫あると叶え
ざれば止むこととや得た大坂の假の家孫と孫よ
しで東海道へ矢拂り表裏道の交際と便り了る
急や渡がんと存ねり見れど近路へ彼者の去と
の標傍嚴しく遠さる思ひて催ふま由忽ち警視
のす込よ今踏込れしハ捕縛となり此方の目法
裁別よ引渡されしハ其者の罪名よより懲役よ

或ハ五軍三軍と撰練よりつて定めたる明治の
 格代のありがごとまりの始よりつて悪人の罪を
 獲りつて或ハ又罪なき者や捕つてつて材を食する悪
 弊の一洗なりつて裁判も後より掛り見ると如く清藤
 なるは維古の鬼の住りし里の土を由日々よ
 愛人新なるあり只管已が職業を勉むるありは
 風俗の愛りゆく世とありしうが二個の者が使
 りゆく先くも今の速正実の家業と才や望
 め言葉やさくも智さねば今うの世に東海道の集
 津の宿より別ゆせぬ人力を挽きと海やか人
 日やとうり一暮りゆく果敢なき海は落ぶれ
 りの希りや梅樵一心を改めつて不惑は願ふな
 ば末よの品の人男となりも志おんよ生れつき同よ
 り善なき者どもよや流のなきりも福のどと
 女郎賢どありつ合の消き甘く看めたるよ
 正実お供する白痴くくのと悪よの智慧のま

或ハ五軍三軍と撰練よりつて定めたる明治の
 格代のありがごとまりの始よりつて悪人の罪を
 獲りつて或ハ又罪なき者や捕つてつて材を食する悪
 弊の一洗なりつて裁判も後より掛り見ると如く清藤
 なるは維古の鬼の住りし里の土を由日々よ
 愛人新なるあり只管已が職業を勉むるありは
 風俗の愛りゆく世とありしうが二個の者が使
 りゆく先くも今の速正実の家業と才や望

め言葉やさくも智さねば今うの世に東海道の集
 津の宿より別ゆせぬ人力を挽きと海やか人
 日やとうり一暮りゆく果敢なき海は落ぶれ
 りの希りや梅樵一心を改めつて不惑は願ふな
 ば末よの品の人男となりも志おんよ生れつき同よ
 り善なき者どもよや流のなきりも福のどと
 女郎賢どありつ合の消き甘く看めたるよ
 正実お供する白痴くくのと悪よの智慧のま

雨好途
み處女
と苦
まお



どまぢやア今日かゝ閑店の^ま安賣料理^りを始め
中^{ちゆう}へ^へ咄^{はな}ぐ^ぐま^まと^と極^{きま}つ^つ日^ひふ^ふや^やな^なと^と先^{せん}の^の立^た場^ば迄^{まで}
梳^ひき^きの^のく^くわ^わと^と肩^{かた}の^の宿^{しゆく}で^で今^{いま}宵^よの^の手^て始^はめ^めマ^マ
オ^オツ^ツト^ト宿^{しゆく}藏^{ざう}へ^へあ^あれ^れま^まぞ^ぞ一^{いち}知^ちぶ^ぶ丈^{ぢやう}助^{すけ}へ^へン^んぢ^ぢ
物^{もの}め^めお^おろ^ろろ^ろ富^ふの^の山^{さん}福^{ふく}さ^さら^らと^と吹^ふき^き來^きる^る風^{かぜ}の^の音^ねへ^へ
ナ^ナン^ンダ^ダカ^カ亭^{てい}く^くな^なる^る中^{ちゆう}う^うぞ^ぞと^と膚^{くわ}京^{けい}の^の双^{しゆう}踏^{たふ}さ^さ一^{いち}マ^マ
り^り新^{しん}く^く備^びも^もけ^け日^ひの^の夕^{ゆふ}ま^ま多^たれ^れち^ちも^も付^つく^く燈^{あか}り^りと^と心^{こころ}
當^{あた}よ^よス^スカ^カハ^ハタ^タ路^ぢら^らる^る喜^き調^{ぢゆう}の^の女^{にょ}軍^{ぐん}の^のよ^よう^うゆ^ゆく^く十^{じゅう}

ハぢりり^{はぢりり}務^む目^めな^なる^る由^{よし}人^{ひと}は^は確^{たしか}は^はい^いと^と見^み人^{ひと}ぬ^ぬど^ど色^{いろ}
向^{むか}く^く顔^{かほ}ぶ^ぶぢ^ぢと^と人^{ひと}由^{よし}十^{じゅう}人^{にん}並^{なら}び^びと^と膝^{ひざ}了^{りやう}優^{ゆう}一^{いち}き^き風^{かぜ}俗^{ぞく}ハ
云^いハ^ハ出^いと^と知^ちれ^れと^と素^す人^{にん}振^ふ向^{むか}ふ^ふと^と急^{いそ}ぐ^ぐハ^ハ舞^まな^な旅^{りょ}
と^とい^い加^かれ^れぬ^ぬ中^{ちゆう}う^うま^まと^とま^まり^り一^{いち}跡^{あと}と^とつ^つけ^ける^る人^{ひと}力^{ちから}を^を梳^ひ
き^きへ^へ毛^けと^と繕^{つくろ}さん^{さん}か^か何^{なに}歩^あでも^{でも}思^{おも}は^はる^るで^で中^{ちゆう}う^うと^とせ^せ人^{ひと}ま^まと
ふ^ふせ^せ被^あ方^ちへ^へ梳^ひと^とせ^せ先^{せん}を^を梳^ひく^くと^とう^うり^り寫^{うつ}し^しの^のく^く
と^とふ^ふに^に髪^{かみ}は^はお^お若^{わか}な^なさ^さい^い空^{そら}か^かも^もり^りの^のや^やア^ア私^{わが}考^{こう}が
思^{おも}い^いれ^れ急^{いそ}び^びを^を梳^ひぶ^ぶま^まら^らと^とあ^あう^うけ^けら^らま^まら^ら娘^{むすめ}へ

より大縁天の柱を板橋をよさし掛りトモシ島
 渡お祈なさいませ一板橋わら小ぶひでのり込む
 と兵部を中つてあるが中々ありませんら落由あり
 だが金体文句が甘く中つてあるぞ一更りやア英一
 様の作がさつりめか甘へもがサ一へ一様あんぞの
 魚むり書のごと思ひの外値を酒落者でござい
 ままよ一何し方被降代の通人サまのち沈んで
 あんぞ由那人の作ヨ一降よ具形遠角の家をよ
 さいままらう僕奴が身渡指子と窺つて一コウお
 め人のい事できつて来や又来のぶが能ひらノ
 一大丈夫でおざいませ任せやお置なさいト言
 個をよ込み内よ入し程なく程中のニコニコと
 一お知で来り一サア一仕方へお這なさいませ一何
 の上首尾上と言今日如何なる若日ヨごととる
 の悪さうと道入葉一弱うが手と捕へ無程よ
 引き入れ小言よなうく一主人の女が別居の

上玉でおぼろいませう。且ね道は恍惚ちや。往ま

せんゼアリン。串戯云のちや。往ね入。ア。ア。

記者云く是よりお電弱ら。ハ計ら出。時おは。懸

遠し。そより終は怪しき。及と。結び。自由。夜。初。入

縁。後。より。し。る。最。物。始。り。し。き。奇。怪。あ。り。并。ハ。又

近き。小。編。と。續。ぎ。拾。遺。の。巻。は。解。き。か。べ。い。小。説

後。花。の。二。個。が。中。由。り。の。原。也。や。が。ち。う。う。ひ。み。め

文。娘。と。な。り。て。娘。ハ。一。再。び。店。や。室。法。所。よ

む。り。一。子。娘。は。男。業。者。日。々。高。た。る。ハ。の

驚。鳥。の。忠。義。不。凝。一。忠。助。が。身。を。粉。と。碎。ひ。て。後

ぎ。一。あ。と。ふ。現。今。富。法。所。の。上。正。と。一。二。や。事

ふ。異。族。の。官。丸。か。の。肉。の。肉。より。噴。女。な。る。り。と。だ

終。く。内。外。の。家。を。や。枝。け。威。軍。様。一。ま。春。林。や。向

ゆる。心。一。と。悪。漢。の。茂。次。丈。助。が。東。海。を。よ。り

荒。塚。ぎ。せ。一。部。始。終。と。危。難。ふ。出。で。あ。ら。ぬ。娘。の

あ。と。其。他。奇。怪。の。話。と。と。兼。す。ハ。小。編。の。巻。末

あ。と。其。他。奇。怪。の。話。と。と。兼。す。ハ。小。編。の。巻。末

あ。と。其。他。奇。怪。の。話。と。と。兼。す。ハ。小。編。の。巻。末

まふよ漏まらるるおろ常きつらり考覧よ入れん
と思ひしよ山登ららんや紙頁の思ひしよ
ゆふ是なる心現まらるより書き録せし者等の
らり作者まふ遠感めりとも録ありおど遠
ゆ止むらとよ得さる場合宜しと涙あふらん
るを編み録し中まよあらん
本文の草稿を全く終る書き留しに正し之れ
明治十有四年四月八日なり今年未だ終る

し梅花湖く満花の報あり梅花の中へ
志す馬ふ鞍おろ心配ありおろ軒端の茅板
よ嘯ぶる鳥の音のち麻く花のちるとも自然
心へ春の風流ふ実よ麗胡を詠めなむおどや

本編の作者 梅雨山人春補述

落花春風日記第五編下 大尾
清潭

明治十五年二月廿四日 御届

府下京橋區南鍋町丁目一番地

著述人 松村春輔

同區彌左工門町十三番地

出板人 武田傳右衛門

同淺草區三好町七番地

同 大川錠吉

同區福井町五番地

發賣人 高梨彌三郎

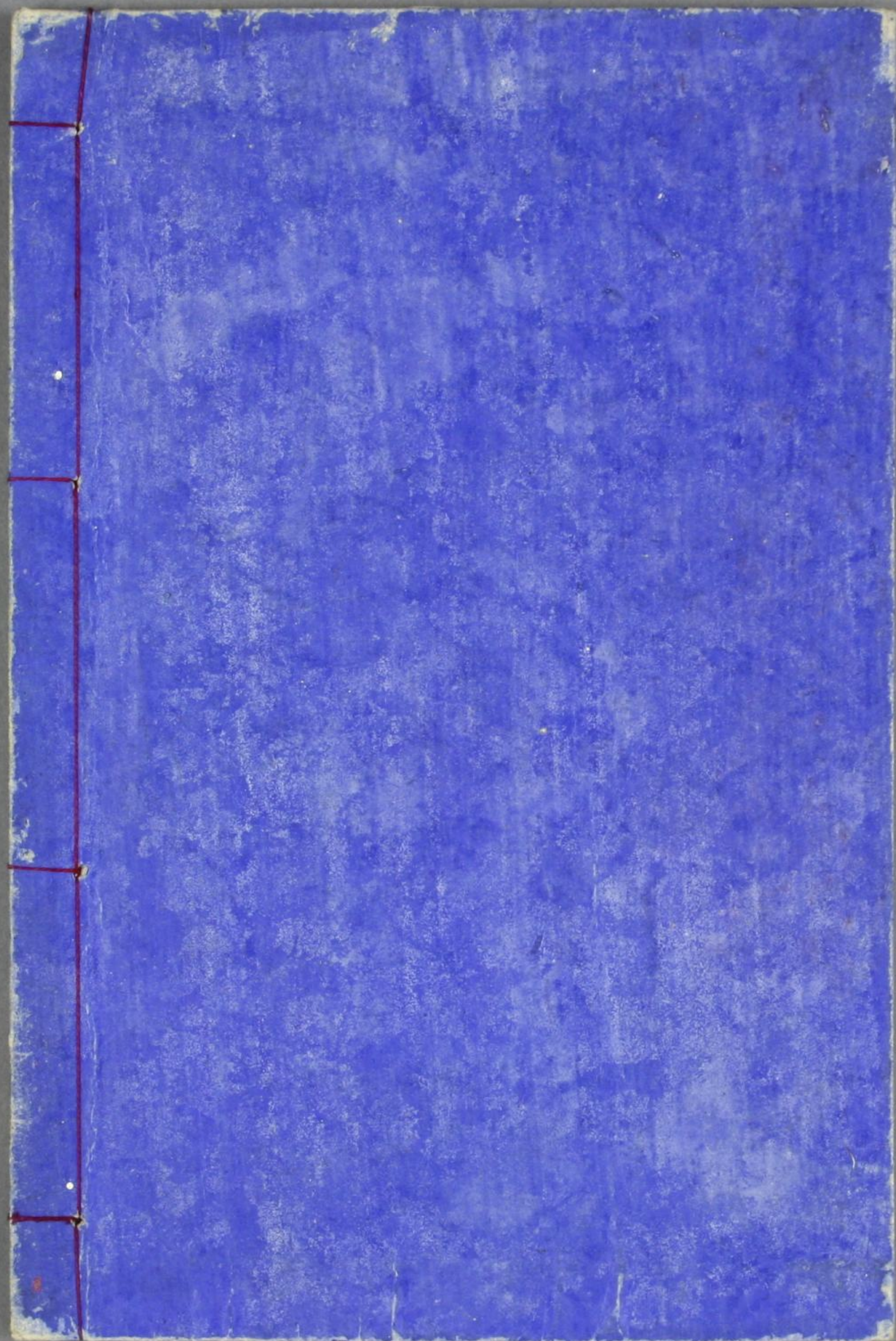
開明小説 春雨文庫 第四編ヨリ 近世の烈婦孝女乃傳統を
引續き出版 記し面白き珍書あり

松村春輔編輯 復古夢物語 初編ヨリ 出版 遠ハ明治太平記の前篇ありて嘉永
六年亞米利加使節相州浦賀へ來船
以來明治元年伏見戦争迄委し
き面白き書也

和田定節編輯 参考鹿兒島新誌 半紙本 初編ヨリ七篇 此書西国征討の始末を詳細に
述ぶ第一の實録あり

東京書肆 大島屋 武田傳右衛門

弥左工門町上二番地





東京書肆

二書房發兌



松村春輔編輯
落花
清潭
春風日記
松齋吟光画
五篇